

市町村と県をネットワークする

NIIGATA 市町村情報

No.658

地方自治とまちづくりの情報誌



2 特集

学生による若者向け選挙啓発活動
「Niigata選挙カレッジ」について

6 地域づくりインタビュー

妙高はねうま複業協同組合 事務局長
東 智隆さん

8 施策・取組紹介

人口減少社会における
行政サービスの持続に向けた取組について

10 地域伝言板30

20 若手職員が突撃!

弥彦村 やひこブランドの魅力に迫る

22 人事交流近況報告

関 春香さん(燕市→県市町村課)
大谷地 友佳さん(県→小千谷市企画政策課)

23 ふるさと納税お礼品の紹介

加茂市 糸魚川市 田上町

学生による若者向け選挙啓発活動 「Niigata選挙カレッジ」 について

1 はじめに

若年層の投票率は、他の年代と比べて低い傾向があります。令和6年10月に行われた衆議院議員総選挙では、10歳代が39・43%、20歳代が34・62%、30歳代が45・66%となっており（全年代を通じた投票率は53・85%）、他の年代と比べて若年層の投票率は低い水準にとどまっていることがわかります。（注1）

（注1）総務省 HP「国政選挙の年代別投票率の推移について」より



若年層の投票率の向上に向けては、全国の選挙管理委員会や民間団体でも様々な取組がありますが、本特集では、県内の大学生が若者への選挙啓発活動を行うユニークな取組である「Niigata選挙カレッジ」（以下「選挙カレッジ」）（注2）をご紹介します。

（注2）選挙カレッジは、国民の投票参加ときれいな選挙の推進並びに政治意識の向上に取り組み、他の模範とするにふさわしい活動として、平成29年度・令和7年度に（公財）明るい選挙推進協会から「優良活動賞」を受賞しました。

2 選挙カレッジの概要

選挙カレッジは、若者の政治意識や投票率向上を図るために「新潟県明るい選挙推進協議会」（注3）が実施する参加体験型の啓発活動で、若者が当協議会の実習生として、1年間、選挙関連の啓発活動に参加し、選挙への理解を深めながら同世代へその重要性を伝えていくことを目指しています。

（注3）学識経験者、女性団体、報道機関、公民館、教育関係者などの方々により構成され、本県における県民の政治意識の向上を図る等、明るい選挙の実現を目的とした団体です。県内市町村や全国の自治体にも同様の団体があります。

令和7年度は、公募により選ばれた県内3

するこども投票所に参加したこどもたちに「自分の一票が結果に反映されている」という実感を持つてもらおうことを意図したそうです。

れいわ7ねん7がつ19にち
こどもどうようじょ こうほしやのしょうかい
Niigata 選挙カレッジ

さどきんざんのめいすいくん

さどきんざんのすごさをひろめたい

- さどきんざんのことについてはなんでも知っているものしりなめいすいくん。
- さどきんざんをしょうめいするにいろいろなところでせんでんをしよう。
- さどのゆたかなげんがだいすき。

えだまめのめいすいくん

えだまめをとにかくたくさんたべろ

- ざるにはいったやまのえだまめをべろりとすくたくてしよう。
- にいがたけんのえだまめのおいしさをにほんぜんたいにつたえたいとおもっている。
- とくいわざはえだまめのはやくい。

おにぎりめいすいくん

おにぎりがだいすき

- にいがたけんのコシヒカリでつくったおにぎりがとくにすき。
- すきなおにぎりのくは、うめぼし。
- おにぎりのつくりにかたをおしえてくれる。

令和7年こども投票所の候補者!?

それぞれの特性に応じて内容や進め方を工夫し、選挙や政治を身近に感じてもらうことを目的としています。実施前には、リハールを行い、その場で出た改善点を踏まえて手直しをしてから本番に臨み、より質の高い授業を提供できるように意識しています。

令和7年度は、新潟大学創生学部の中一裕教授の講義内で出前授業を行い、大学2年生31名が参加しました。

授業前半では、自分たちに身近な社会課題の現状と今後について理解を深めることを狙いとして、カレッジ生が講師となり人口減少をテーマとした授業を行いました。授業後半には、カレッジ生が市長選挙の候補者を演じ、人口減少対策を訴える演説を行い、その後模擬投票を行いました。

参加した学生は、候補者の演説を聴いて候補者のどの政策が良いと感じたのか、候補者を選んだ又は選ばなかった理由は何かなど活発に意見交換を行いました。

授業の中では、「フェイクニュース」、「フィリターバブル」といったキーワードも解説され、時代に合わせて参加者の興味関心を引く内容になっています。

③若年層への啓発

令和6年度には、新潟大学において「若者と若手議員による政治・選挙に関する意見交換会」を開催しました。当日は学生のほか、若手議員3名と大学教授が参加し、「若者にとって住みやすい街とは何か」をテーマにパネ



こども投票所の様子

②出前授業

カレッジ生が企画した授業を、県内の高校や大学に出向いて行っています。高校や大学



グループワークの様子

つの大学の学生23名が、選挙カレッジ実習生（以下「カレッジ生」）として活動中です。新潟県のホームページから、各年度の活動状況を確認することができます。



新潟県HP
(Niigata選挙カレッジ)

カレッジ生は、複数のグループに分かれて活動を行い、事業の企画から実施まで主体的に取り組みます。自分たちが企画し、実施された結果を自分たちで確認できる点で、やりがいと達成感がある取組です。

選挙カレッジでは月1回の定例会で活動の振り返り、選挙や政治に対する学びを深めるための座学、意見交換などの活動のほか、次

ルディスカッションを実施しました。その後、学生を3チームに分け、各チームに1名の議員を加えて「投票率向上の意義」や「若者の投票率を高める方策」について話し合いました。学生と議員が直接意見交換をすることで互いに新たな気づきが得られました。



若手議員との意見交換会の様子

④ SNS

SNS (Instagram・X等) において、選挙カレッジの活動報告や選挙啓発イベントの告知等を行っています。政治や選挙に関する制度や仕組みをイラストで簡単に解説し、それを踏まえてクイズに挑戦できるような投稿もあります。

また、選挙時には、カウントダウン投稿も行っています。内容は投票日の1週間前からカウントダウンを行い、各投稿で投票に関するルールのクイズを出題するものです。ただ日数を数えるのではなく、投票ルールを理解してもらい、適切な政治参加を促す目的で

実施しています。

更に、カレッジ生にアンケートを行い、参加した経緯や参加して良かったことなど生の声を集め、その情報を発信して、新規メンバー獲得にもつなげています。



衆院選投票まであと SNS による選挙カウントダウン

⑤ その他の活動

開票に関わるアルバイトをしたカレッジ生もいました。業務内容は、開票データの入力や照合作業であり、本番想定のリハーサルと投票日の2日間にわたり従事しました。このようにカレッジ生自身が選挙に直接関わることで、啓発活動の説得力を高めるとともに、選挙の仕組みや公正性を支える現場の重要性を理解する機会となりました。

3 カレッジ生インタビュー

このように選挙カレッジでは、カレッジ生の創意工夫により事業が実施され、毎年、取組がバージョンアップされています。

この取組に参加する学生の「やる気」の源を知りたくなり、令和6年度に選挙カレッジ代表を務めた斎藤遼空(さいとうりく)さんにインタビューしました。

しなければいけないのでそこは難しかったですね。

また、SNS班を立ち上げたものの、具体的にどんな発信をするのがいいのか考えたり、選挙に間に合うように急いで対応したりすることが大変でした。

最近、若者の選挙や政治への関心が高まっているなどという実感があつて、実際に投票率も上がっています。それはなぜかと考えると、やっぱりSNSの影響かなと思っています。若者にアプローチするためには、SNSを用いて政治や選挙をとにかく身近に感じてもらえるような発信や取組ができればいいのかなと思います。ながら活動しています。

Q 選挙カレッジで学んだことは何ですか。

選挙カレッジでの活動を通して、選挙のとき、あまり思い詰めずに、もっと気軽に投票してもいいものなんだという気持ちになれて、そういった投票に対する向き合い方のところを経験を活かしているのかなと思います。

今、若い人たちに投票しない理由を聞くと、自分は政治のことは分からないから意味がないのではないかとことや、政治というのが怖いといった「遠慮」が投票率が低い一つの要因かなと思っています。

もちろん投票するときは、いろいろな政党や、政治家の方の政策を比較してちゃんと知識を持って「いいな」と思うところに投票できることが理想かもしれません。しかし、投票したことがないとか、政治に対して知識がな



カレッジ生 斎藤遼空さん

Q 選挙カレッジに参加したきっかけを教えてください。

大学1年生のとき(入学直後?)、選挙カレッジをチラシで見えて知って、5月から参加しました。結果として、令和4年度から令和7年度まで4年間参加しています。

Q 4年間も継続して参加した理由を教えてください。

この活動に意義を感じたし、楽しかったことに加え、自己成長にもつながるので、そこがモチベーションでした。

Q 自己成長とは、具体的にどのような成長ですか。

選挙に関する知識はもちろん増えますが、自分は、代表としての組織の運営、イベントの運営、人前で話す経験、普段お会いできない人(議員、県庁の職員、イベントでお会いする方など)と会えることで視野が広がるなど、様々な経験を通じて成長できると思っています。

いとか、普段関心がないという方でも、少しでも自分の生活に不満があるとか、気になる点があるのならば、その気持ちに寄り添っているところに投票してみるなど、まずは気軽に選挙に参加してみるといいことが、将来的により良い投票につながるかなと思っています。

若い人が投票することで、候補者も若い人の声を聞いてくれるかもしれないし、日本の未来に向けて政策をたくさん出してくれるかもしれません。そうすると若い人にとっても政治に関心をもちやすくなっていくという良い循環ができそうな気がします。

Q 選挙カレッジのPRポイントは何か。

県内の大学生はどなたでも参加していただける団体です。学部を問わず、少しでも政治や選挙に興味がある方、何か新しいことに挑戦したい方、公務員への就職を考えている方など、どなたでも参加してよかったなと思える団体だと思います。

斎藤さんのインタビューを通じて、カレッジ生が楽しく成長してきた姿が想像でき、とても清々しく感じました。どうもありがとうございました。

全国的に見てもとてもユニークな取組です。令和8年度も選挙カレッジは参加者を募集予定ですので、ご家族、お友達など身近な方へのご案内にも、ご協力をお願いします。

Q 代表として苦労した点がありますか。

代表をした年は、新しくSNS班を立ち上げたので、立ち上げから運営まで大変でした。もともと、この団体にSNSのアカウントがあったのですが、発信がありませんでした。SNSは今の時代に大事ですし、少しでも多くの人に情報を提供するのは意義があるなと思います、これを動かすための班を作って、積極的に発信しました。

僕たちの活動は意義のある活動だと思っているので、少しでも多くの方に活動を知ってもらって、今後選挙カレッジに入りたいと思う方が少しでも増えたらいいなという思いがありました。

Q SNSの効果は感じましたか。

新潟県内の学生の方からアカウント投稿に「いいね」してもらう数やフォロワー数が増えたり、他の選挙啓発系の団体の方とSNSでつながって一緒にイベントをするきっかけになったり、新しいつながりができたのがよかったですと思います。

発信の内容は、新潟県選挙管理委員会が関わっている組織でもあり、メンバーの意識という共通認識を持っているので、「すべての方に謙虚にいきましょう」という姿勢を心がけています。まだまだ見てくれている人は少ないと思っていますので、多くの方に見ていただきたいという気持ちもあるのですが、中立性も意識

地域づくり インタビュー



**NPO法人はねうまネットワーク代表理事 兼
妙高はねうま複業協同組合事務局長
東 智隆さん**

今回は、妙高はねうま複業協同組合事務局長の東智隆さんにお話を伺いました。

東さんは妙高市を拠点に過疎地域の人手不足解消と地域の魅力発信に取り組みまれており、都市部での人事経験を生かして「人」と「地域」をつなぐ新しいモデルづくりに挑戦しており、2025年には第5回新潟SDGsアワードで大賞を受賞しています。そんな東さんに、これまでの取組、妙高市での暮らし、今後の展望について伺いました。

これまでの活動

現在の仕事に関わるようになった経緯を教えてください。

愛知県で生まれ18歳まで過ごした後、進学を機に上京しました。社会人キャリアのスタートはメディア関係で、その後、メーカー企業の人事・採用戦略部門、大学教授に、今後の展望について伺いました。

次に、人材シェアリングです。農業、林業、酒造、観光など、繁忙期が異なる事業者同士で人材をシェアし、1人の若者が複数の職場で働く仕組みをつくっています。人材シェアリングを行うことにより、若者は「マルチワーカー」として多様な仕事を体験でき、事業者側は繁忙期に必要な人手を確保できるなど双方にメリットのある事業となっています。さらに、移住・定住支援として、遠方から来る若者に対して、住まい探しや車の購入支援、生活ルールの説明、仕事やプライベートの悩み相談など、伴走型の支援を行っています。

活動する上で大切にしていることを教えてください。

大切にしているのは、「きれいごとだけで終わらせないこと」です。地方で生きていく現実(苦労)も含めて、実情を率直に伝えるようにしています。例えば、社会経験が乏しい若者には、この先どのように生きていくのかといった話も真正面から話します。ある意味ショック療法かもしれませんが、覚悟を持って来てくれた人は移住後の定着率が高いように感じています。また定着率の決め手は移住者と地域住民の間に立つ「通訳者」の存在が大きいです。ごみ出しのルールや排雪マナーの理解など、ちょっとした違いが後々大きな問題になることがあり、そのたびに双方の話を聞き、

育、IT企業の人事責任者、法律事務所の支援業務(バリアーガルの採用育成・派遣)など、一貫して「人に関わる仕事」に携わってきました。

東日本大震災後に被災地ボランティアの活動をしていたのですが、「人事」という仕事は非常時には能力を生かしくく、自身の無力さを痛感しました。それゆえに、「手に職をつけたい」「地域の現場で役に立つ働き方をしたい」と強く思うようになりました。そんななか新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によって真綿で首を締め付けられるように静かに衰退していく過疎地域の現実を目の当たりにしたことをきっかけに、人口減少が進む妙高市で自分の人事経験を生かしたいと考え、仲間とともにNPO法人はねうまネットワークを設立しました。

NPO法人はねうまネットワークは、妙高市へのUターン、イターンの促進誘致等、新潟県における人口減少問題の解決に貢献する活動全般をしています。また徐々に妙高市への移住希望者が増加してきたこともあり、移住者の受け皿となる妙高はねうま複業協同組合を設立しました。現在は、NPO法人はねうまネットワークの代表理事と妙高はねうま複業協同組合の理事兼事務局長を兼務しています。

NPO法人を設立して試みての周囲の反応はいかがでしたか。

ポジティブな反応とネガティブな反応の両方がありました。ポジティブな面としては、NPO法人として法人格を持つことで、責任を伴う主体として地域に関われるようになったことです。任意団体や無償ボランティアでは「何かあってもボランティアだからね」で済まされがちですが、法人として活動することで、地域に対す

る説明責任や継続性への覚悟が評価されました。

一方で、NPO法人は活動資金の確保に苦労するイメージが強く、「本当に継続できるのか」「やりたいことを続けられるのか」といった不安の声もありました。そのたびに、私たちが目指す地域像や人材循環の仕組みについて丁寧に説明し、地域の方々の理解を得てきました。

妙高市で暮らしてみて、どのような魅力を感じていますか。

一言で言うと、「人を見捨てない場所」だと感じています。この活動を行うまで、私は妙高市で生活したことがありませんでしたので、地域の方からすれば海のものとも山のものとも分らない存在だったと思います。それでも、「最近どうなの?」「新聞で見たよ」と、常に気にかけて声をかけてくださいます。

また、皆さんは口では「何が地域の魅力かわからない」と言いながらも、話していくと結局は地元が好きなのだと伝わってきます。都会にいた頃は、学歴や年収、役職など、さまざまなフィルターの中で、常に誰かと比べていた感覚がありました。等身大の自分を受け入れてもらえることも大きな魅力だと感じています。

現在の活動内容

妙高はねうま複業協同組合は、どのような活動に取り組んでいますか。

大きく分けると、「関係人口の創出」「人材シェアリングによる人手不足解消」「移住・定住支援」の3つです。

まず、関係人口の創出としては、首都圏の大学と連携し、学生のフィールドワークや創作活動の受け入れのように地域づくり活動をしていきたいと考えている方たちに支援ができるような活動を行いたいのです。そのためにも、「横の連携」を強化する必要があります。例えば、妙高市はアウトドアや雪国の暮らしといった資源がありますが、他地域には海や歴史文化など、異なる魅力があります。「新潟」という大きなフィールドの中で補完し合いながら、地域づくりを進めていけるようなネットワークを形成していきたいです。

地域づくり活動を行う中で新潟県や市町村に期待することは何ですか。

行政機関はどうしても縦割りになりやすく、似たような業務が別々の部署で動いていることが多々あると聞いております。先ほどもお話ししたように、地域づくりは「横の連携」が重要になりますので、人材や情報を循環させていく仕組みづくりを、県と市町村と一緒に進めていってほしいと考えています。

今後の展望

今後やっていきたい活動はどんなことですか。

「なぜそう感じるのか」「どうすればお互いに気持ちよく暮らせるか」を一緒に考えていくことを大切にしています。

妙高市の中だけで考えると、これまでの活動で培ったノウハウをより地域に還元するために、現在、妙高市と協力して「妙高市の人事部」設立を進めているところです。これは妙高はねうま複業協同組合の運営を通して、関東から多く移住者を採用し(採用(採用力の強化)」、仕事を通して地方部での「キャリア教育」を組合職員に行いつつ、派遣先での職員の活躍を「評価」します。例ではありますが、このような「採用(採用力の強化)」、「キャリア教育」、「評価」などのノウハウを妙高市内の事業者へ落とし込んでいけるような組織にしたいと考えています。

また、妙高市内だけにとどまらず、これから当組合



令和7年度妙高はねうま複業協同組合第2回通常総会時の集合写真(2列目左から2番目が東さん)



現在の加入企業は12団体に及んでいる。

東智隆さん



愛知県出身。メディア関係メーカー企業・IT企業等の人事部門を経て、2021年「NPO法人はねうまネットワーク」を設立。多様な仲間達と地域資源を生かしたまちづくりを進めるなかで、事業承継などを行い地域の事業者とネットワークを広げた。2023年官民共創となる「妙高はねうま複業協同組合」を設立し、設立から1年で県内最大の職員数を抱える複業協同組合へと成長させる。現在は人事、教育等、幅広い観点から地域づくりに取り組めるよう、行政機関等と連携して活動を行っている。

施策 取組

紹介

人口減少社会における行政サービスの持続に向けた取組について

総務部市町村課
行政班

1 はじめに

わが国は平成21年をピークに毎年人口が減り続けており、少子高齢化に伴い生産年齢人口は減少しながら東京一極集中は進むという大きな流れが続いています。

これらの人口構造・分布の変化の結果、地方公共団体では、技術職員や保健師、デジタル人材などの専門人材を中心に人材不足等の課題が現実のものとなっており、県内自治体に勤務する皆さんの日々の業務の中でも、人手不足を実感されているところではないでしょうか。

そこで、今回は、人口減少社会における行政サービスの持続に向けて、これまでどのような議論が行われ、今後どのような施策が展望されているのか、あらためて紹介します。

2 現状の確認

本県では、出生数の減少等による自然減の拡大と、若者を中心に進学や就職を理由とした県外への転出超過により、全国を上回るペースで人口減少が進んでいます。新潟県の「県民歌」には「県民250万」と謳われていますが、平成10年1月の249・4万人をピークに、令和7年1月には約211万人にまで減少しています。

国立社会保障・人口問題研究所が令和5年に行った

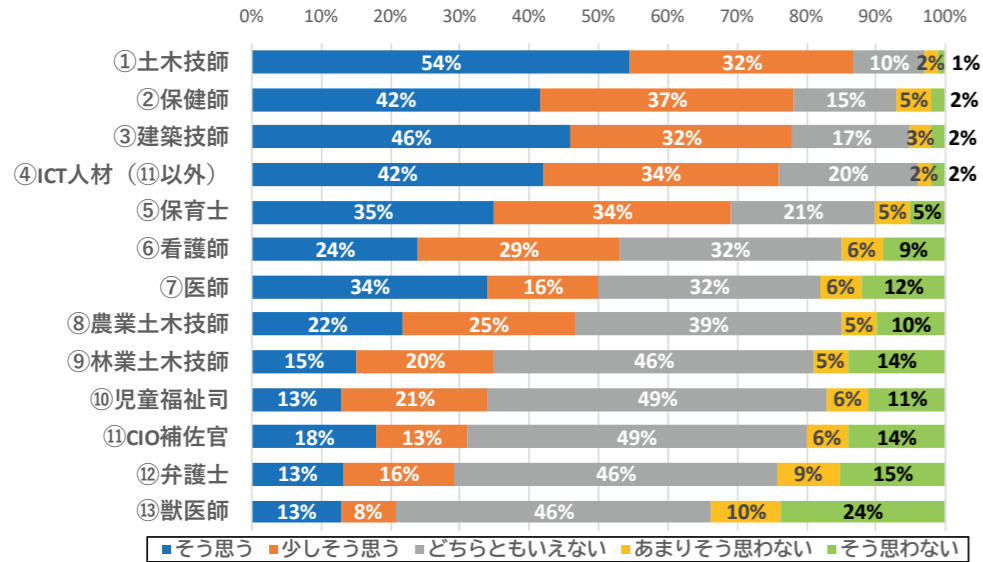
4 「水平連携」の現状と課題

「②事務をまとめる」のうち、市町村同士が協力し合う「水平連携」に関して、中心市とその近隣の市町村とが協定を締結して互いに役割を分担し、圏域全体で都市機能の維持確保を図る「定住自立圏」が平成20年に制度化されています。また、平成26年には、三大都市圏の魅力や活力に対抗していくために「連

■地方公務員行政に関する地方公共団体へのアンケートの結果

n=1,011(都道府県47団体、指定都市20団体、市区町村944団体)

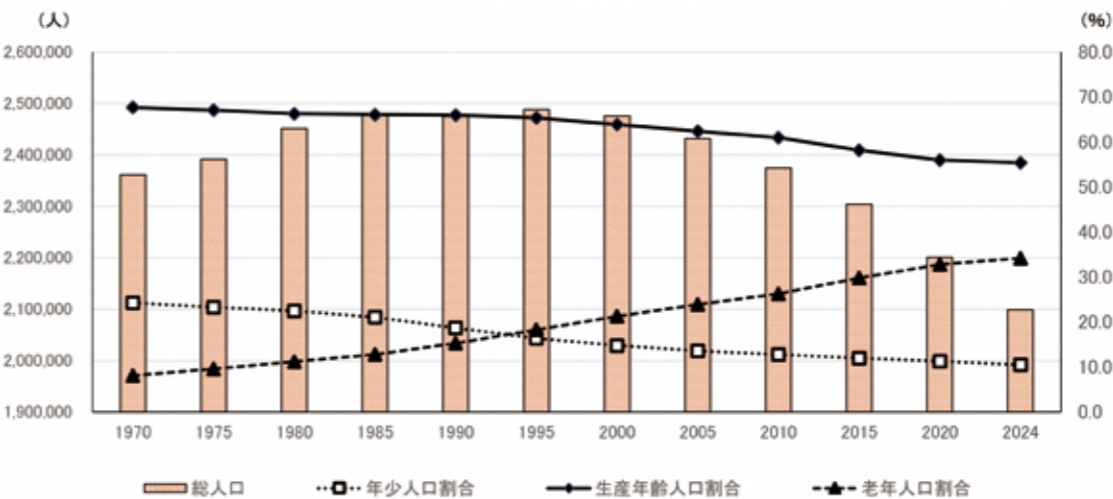
問 以下の専門職、技術職について、それぞれ人材・体制確保に関して大きな課題があると思うか。



(出典)R3.12総務省調査「地方公務員行政に関する自治体アンケートの結果について」

■新潟県の総人口、3区分人口の推移

○老年人口(65歳以上)割合が増加し、年少人口(15歳未満)割合と生産年齢人口(15~64歳)割合は減少



(出典)総務省「国勢調査」「人口推計」、新潟県「新潟県の人口移動(月報)」を基に県作成

3 「持続可能な地方行財政のあり方に関する研究会」の問題意識と議論

総務省では、地方自治体の行財政をどのように持続可能なものにしていくのかについて、令和6年11月から「持続可能な地方行財政のあり方に関する研究会」を開催し議論を重ね、令和7年6月に報告書を公表しました。この中で、地方公共団体の体制を持続可能なものにしていくための対応方策として、①事務を減らす、②事務をまとめる、③担い手を広げる、④生産性を高めるという4つの方向性を示しました。

それぞれの具体的な手法として、①事務自体の廃止や頻度の見直し、②水平連携や垂直連携、③民間活用や住民参加の促進、④デジタル技術の活用などが考えられ、これらの方策を組み合わせることも含め、具体的な事務処理の実態を踏まえた検討が必要であるとしています。

6 「地方制度調査会」での議論へ

国では、内閣総理大臣からの諮問により令和8年1月に「第34次地方制度調査会」を立上げ、「将来にわたり、地域の特性に応じて、持続可能な最適な形で行政サービスを提供していくため」に必要な地方制度のあり方について、令和9年末の答申を目指し、議論を進めていくこととしています。

具体的な結論は今後の議論次第となりますが、総務省の「研究会」より踏み込んだ議論となり、将来的な国の制度改正につながっていく見込みです。

7 おわりに

人手不足の中、皆さんも日々の業務の効率化・省力化に頭を悩ませていることと思います。人口減少に起因する様々な課題は、一つの自治体のみでは解決することが難しいことが多く、行政サービスのあり方については、貴重なリソースを、どう配分するか、住民、企業、関係団体等の地域を担う各プレイヤーが課題や方向性を共有し、互いに知恵を出し合いながら、あらためて検討していくことが必要となるでしょう。

5 今後の方向性

最近では、地方公務員の定年引上げや役職定年制の導入が始まったことで、これまでの経験や専門性を生かして活躍できる環境を整備し、高齢層の職員をどう組織の活力につなげていくかも課題となります。

そのほか、過去の号でも紹介した公共施設の集約化や共同利用(No.657)に関しても広域連携の枠組を活かすことができます。

「研究会」が公表した報告書では、あらためて、地方分権や市町村優先の原則を、今後も我が国の地方自治を支える重要な原則であるとしました。他方で、急速な人口減少・少子高齢化局面において、資源のひっ迫により、地方自治体はその大半のリソ

※本稿は、保科実「持続可能な地方行財政のあり方に関する研究会」報告書について(地方自治 No.935、令和7年10月)や、浅見仁「人口減少時代の広域連携施策について」(地方自治 No.919、令和6年6月)を参照した。

上越地区



糸魚川市

大学等連携集落活性化実践事業

糸魚川市では、大学等連携集落活性化実践事業として、大学等の教育機関が住民と連携して行う地域活性化の調査研究、実践活動に対して、支援を行っています。

今年度は早稲田大学、新潟大学、東京海洋大学の3つの大学が当市の地域活性化に取り組みました。

早稲田大学は、「10年後も幸せを感じながら暮らし続けたいくなるまちづくり」をテーマに、市内の若者や事業者などとの懇談や市内散策を通じて、地域課題の解決策を提案しました。

新潟大学は、市内中山間地域である小滝地区において、フィールドワークや地域イベントの共同運営を行い、小滝地区の魅力やSNSで発信しました。

東京海洋大学は、糸魚川ユネスコ世界ジオパークの英語版体験プログラムを企画し、市内で研修旅行を実施しました。



郷土料理である笹寿司を地域の人に教わりながら作る新潟大学生



詳しくは二次元コードから。

問い合わせ先／
企画定住課 地域振興係
TEL 025-552-1511



長岡市

与板地域交流拠点施設「いこいね☆よいた」がオープン、地域の想いが詰まった憩いの場

令和8年1月13日、与板地域に新たな交流拠点施設がオープンしました。

城下町の面影が残る与板の街並みと調和した和風デザインが特徴の本施設は、屋根付き広場・多目的広場・駐車場と屋内ホールとの一体利用ができる、屋内外の連続性を確保したフレキシブルな空間を実現しています。

施設の愛称「いこいね☆よいた」は、「行こうね」の与板方言「いこいね」と、この施設「いこいね」の意味や、地域の「憩い」の場になるようにとの想いが込められています。さらに、与板生まれのビール醸造人・中川清兵衛にちなんだ「☆」北極星も取り入れられ、与板の未来を切り開いていこうという願いが表現されています。

今後は地域の賑わいの拠点として、コミュニティ活動や多世代交流を通じ、与板地域の活力を高めていきます。



問い合わせ先／
長岡市地域振興戦略部
TEL 0258-39-2260
与板支所地域振興・市民生活課
TEL 0258-44-0062

上越地区



妙高市

自然と学びがつながるまち 妙高市で育てる、これからの子ども

妙高市は、豊かな自然の中で子どもがのびのびと成長できる、子育て世帯にやさしいまちです。市内の全ての学校では、子ども一人一人の主体性や考える力を育む「妙高型イェナプラン教育」を導入しています。また、保育園から中学校まで一貫した外国語活動に取り組み、遊びや日常の中で英語に親しみながら、無理なく国際感覚を身に付けられる環境を整えています。移住を検討する子育て世帯に向けて住まいや仕事の相談、暮らし体験などの支援も充実しています。自然、教育、人のあたたかさがある妙高市は、子どもの成長を大切にしたいと願う家族に、そっと寄り添うまちです。



ALTと園児が外国語活動している様子



詳しくは二次元コードから。

問い合わせ先／子ども教育課
TEL 0255-74-0037



三条市

東京2025デフリンピックで金メダル獲得 高橋朋伽選手に三条市民栄誉賞を贈りました

耳がきこえない、きこえにくいアスリートのための国際スポーツ大会東京2025デフリンピックに、バレーボール女子日本代表として三条市在住の高橋朋伽選手が出場し、金メダルを獲得されました。

三条市では、決勝戦のパブリックビューイングを市役所内で開催して選手たちを応援したほか、金メダル獲得を祝う懸垂幕を庁舎に設置しました。

また、明るい笑顔でチームを盛り立てるとともに、気迫あふれるプレーで金メダルの獲得に貢献され、市民に希望と感動を与えた高橋選手の功績をたたえ、三条市民栄誉賞を贈りました。

高橋選手のますますのご活躍をお祈りします。



問い合わせ先／
三条市 総務部 政策推進課 秘書担当
TEL 0256-34-5521

上越地区



上越市

上越市が拓く、多様な学びの未来 学びの多様な学校 上越市立諏訪中学校

上越市では、不登校や不登校傾向にある子ども一人一人の学びを保障し、市内のすべての子どもが学びにアクセスできる環境を整えるため、令和8年4月に「学びの多様な学校 上越市立諏訪中学校」を開校します。

本校は、総授業時数の削減や柔軟な校時表の設定により、通常より遅めの登校や早めの下校を可能とし、ゆとりある生活サイクルを確保します。また、チーム担任制による丁寧な支援体制を整えます。学習では、地域資源を活用した体験的な学びや、上越教育大学との連携による専門性の高い学習環境を提供します。これらの特色ある教育課程を通して、自己肯定感や学習意欲を育み、ゆたかに生きる力を身につけることを目指します。

不登校支援を「特別な対応」と捉えるのではなく、すべての子どもを包摂する教育へと転換する契機とします。



上越市立諏訪中学校校舎外観



詳しくは二次元コードから。

問い合わせ先／
上越市教育委員会教育総務課
TEL 025-545-9243



柏崎市

水道事業90周年 『先人たちの功績』を動画と写真で紹介、

柏崎市の水道事業は、昭和10年（1935年）に国の認可を受け着手し、昨年で90年を迎えました。

現在では、3つの水道専用ダムを有し、佐渡・弥彦・米山国定公園や新潟県立自然公園の区域内に存在し、その集水区域を市有地として管理するなど、極めて安全・安心で安定的な水源です。

先人たちが先見の明と未来の柏崎のために礎を築いた水道事業を広く紹介するため、記念事業を実施しました。「先人たちの功績」をまとめた動画を制作し、局ホームページで公開したほか、二次元コード付きデザインコップの市内飲食店への配布や、これまでの歴史を紹介する「90周年写真展」を開催しました。

今後も上水道の歴史と「安全・安心でおいしい水」の理解や関心を深める積極的な広報活動を行っていきます。



二次元コード付きコップ



「90周年写真展」の様子



上下水道局HP

問い合わせ先／
柏崎市上下水道局経営企画課
TEL 0257-22-4111

中越地区

中越地区

中越地区

中越地区



小千谷市

「中越大震災復興記念祭」を開催します

小千谷市では、令和8年4月19日(日)に「中越大震災復興記念祭」を開催します。令和6年度、台風10号の影響で中止となった「市制施行70周年・復興20年」の記念イベントを、全国からの復興支援への感謝を伝える場として再挑戦するものです。

当日は、避難所や物資備蓄などの防災機能を有するとともに、震災の教訓を次世代へつなぐための新施設スポーツコミュニティプレイス「ソコラテ」の内覧会や、ひと・まち・文化共創拠点「ホントカ。」での春まつり、国際幼児品評会を同時開催いたします。

震災の教訓を未来へつなぎ、新たな一歩を踏み出す本市の姿を、ぜひその目でお確かめください。



中越大震災復興記念祭
特設ページ



中越大震災復興記念祭
特設ページ

お問い合わせ先／小千谷市企画政策課
TEL 0258-83-3507



見附市

子育て応援カードをデジタル化しました

見附市では、子育て世帯の負担軽減策の一環で、協賛店が提供する割引や特典などのサービスが受けられる「子育て応援カード」を交付しています。1月20日から、カードを見附市公式LINEで表示し、使用できるようデジタル化を行いました。また、協賛店一覧や受けられるサービスが、LINE上で確認できるようになりました。

これまでは保護者を交付対象としていましたが、デジタル化に合わせて、交付対象を子どもたちにも拡大しました。また、子どもたちがコミュニティバスを利用する際、乗車料が割引になるコミュニティバスカードも「子育て応援カード」と一体化し、デジタル化を行いました。

子育て世帯、子どもたちは、紛失、破損の心配なく、ますます便利にカードが利用できるようになりました。



「子育て応援カード」LINE画面

お問い合わせ先／見附市子ども課
TEL 0258-62-1700

中越地区



加茂市

世界初!? デジタルツイン×市民参加型ゲームで「人間中心のまちづくり」へ

加茂市では、令和5年度より神戸大学の貝原名誉教授を中心とした研究チームとともに「人間中心の社会共創デザインを可能とするデジタル社会実験基盤技術の開発（JST未来社会創造事業）」に挑んでいます。

現実には似せた「もう一つの加茂市」をコンピュータの中につくり、その時間を進めることでシミュレーション上の未来の姿を見ながら市民が対話し、未来を一緒に考えていく取組全体を「デジタル社会実験」という新しい政策検討手法として開発しています。令和7年12月23日に、実際に市民が参加してゲーム形式で行う初めてのデジタル社会実験を開催しました。デジタル技術の活用により、中長期的かつ多様な社会シナリオを高精度で可視化しながら、誰もが気軽に参加でき、高い納得感を持って未来を選択できる仕組みづくりを目指していきます。



プロジェクト
ホームページ

お問い合わせ先／加茂市 政策推進課
TEL 0256-52-0080



魚沼市

若い力がつなぐ、市の未来と情報発信

今年の新潟ふるさとCM大賞は、準グランプリを受賞しました。過去にはグランプリを3回受賞しています。

こうした成果を支えているのが、毎度編成される有志の若手職員によるプロジェクトチームです。多様な発想を行政広報に取り入れ、市の発信力を高めようと、あえて固定化せず毎年新たなメンバーを庁内で募集し、秘書広報課が事務局となり運営しています。さらに、市出身のクリエイター酒井大さんと山之内匠さんが参画することで、より質の高い発信が実現しています。

これまで過去6回のCM制作には、延べ40人もの若手職員が携わってきました。この積み重ねてきた経験と成果を力に変え、市の未来をより良いものへと築いていきたいと考えています。



第6回新潟ふるさとCM大賞準グランプリ受賞
魚沼市公式CM「主役になる」



お問い合わせ先／魚沼市秘書広報課
TEL 025-792-1494

中越地区



十日町市

地元で頑張る若者の支援を開始

十日町市では、地元で頑張る若者を応援するため、令和7年度より2つの支援制度を開始しています。

1つ目は、大学生等通学定期代補助金です。自宅から公共交通機関を利用して大学等へ通学する学生に対し、定期券購入費の一部を補助します。住み慣れた地域から通い続ける選択をサポートします。

2つ目は、新規卒業者地元就職祝金です。十日町市を離れずに最終学校を卒業し、市内の事業所へ就職した若者へお祝い金を贈ります。地元に残り、社会人としての第一歩を踏み出した若者の門出をお祝いし、その後の定着を後押しします。

市では、これら2つの制度を通じて、進学や就職という人生の節目に寄り添い、地元で頑張る若者を応援します。



十日町市新規卒業者
地元就職祝金



十日町市大学生等
通学定期代補助金



お問い合わせ先／
十日町市総務部企画政策課
TEL 025-755-5137



南魚沼市

トイレトラックを導入しました

大規模災害により避難所を開設する場合、問題となるのがトイレです。トイレの数や衛生上の問題から、トイレを我慢するために食事や水分摂取を控えた場合、脱水症状など深刻な体調不良を引き起こしかねません。この問題を未然に防ぐため、南魚沼市では避難生活でも衛生的なトイレを提供できるよう、5基の水洗トイレが設置されたトイレトラックを導入しました。

同時に、災害が発生した際には全国46自治体（令和8年1月末現在）が相互に駆け付け、支援しあう助け合いの仕組みである災害派遣トイレネットワーク「みんな元気になるトイレ」に加盟しました。全国の加盟自治体と協力し、災害時の対策強化を進めていきます。



5基中1基は、車椅子でも使用可能なリフトアップ機能が付いたトイレトラック

お問い合わせ先／南魚沼市総務課防災庶務班
TEL 025-773-6660
FAX 025-772-3055



田上町

開館5周年！
田上町地域学習センター

田上町の生涯学習・文化活動を支える「地域学習センター」が、令和8年3月8日で開館5周年を迎えました。当センターは図書コーナーをはじめ、学習スペースや会議室、調理実習室等を備えており、令和3年のオープン以来、世代を超えて多くの方々にご利用いただいております。

3月5日には5周年を記念して、アナウンサーや田上町ゆるキャラによる読み聞かせを行いました。当日は町内の子ども達が来館し、笑顔あふれる華やかなイベントとなりました。これからも町民の皆様の「学び・交流・憩い」の場として、より一層親しまれる施設を目指してまいります。



問い合わせ先/田上町役場教育委員会 生涯学習係
TEL 0256-47-1201 FAX 0256-47-1232



出雲崎町

出雲崎の日本酒復活！
米の旨味を活かした一本

出雲崎のブランド米「出雲崎の輝き」を使用した日本酒「出輝」が誕生しました。今回の日本酒は、恩田酒造(長岡市)に勤めている、元地域おこし協力隊の坂東拓哉さんが「出雲崎のお米でお酒を造りたい」という思いから、完成に至りました。坂東さんは「地域おこし協力隊のときから、出雲崎のもので何か造りたいと思っていました。今回の『出輝』の製造に携われて良かったです。この日本酒で終わりでなく、また造りたいと思っていますので、『出輝』をぜひ飲んでいただき、皆さんの感想を聞かせてください」と話していました。

「出輝」は味わいがある一方で、後味がすっきりとした日本酒となっていて、出雲崎の魚介類などとのペアリングが楽しめます。ふるさと納税の返礼品となっているほか、道の駅天領の里でお買い求めいただけます。



問い合わせ先/総務課 地域政策室
TEL 0258-78-2290



湯沢町

地元の美味しいものを堪能！
ゆざわナイトマルシェが開催されました

湯沢町の冬は二年で最もにぎわう観光シーズンです。多くのお客様にお越しいただいている中、飲食店が混み合うことからお店に入れず、食事をとることができないといった課題がありました。この課題の解消や湯沢のナイトタイムを楽しんでいただくことを目的に「ゆざわナイトマルシェ」が毎年開催されています。イベントは地場産品を味わえるキッチンカーやテントなどが並び夜市として行われています。今年も1月〜3月にかけて、越後湯沢駅東口アーケード街を会場に計6回にわたり開催され、多くのお客様が歩行者天国となった駅東口アーケード街を巡り、地元グルメを堪能されました。

また、ナイトマルシェは毎年8月に開催される湯沢夏花火にも合わせて実施されています。開催日にはぜひ一度、夜の湯沢町で美味しいものを楽しみにいらしてください。



問い合わせ先/一般社団法人湯沢町観光まちづくり機構
TEL 025-785-5505



津南町

災害発生に備え、
協定を締結しました

令和7年12月18日に東京電力リニューアブルパワー株式会社と、災害時、町内にある同社信濃川事業所の一部を、避難場所として提供していた協定を締結しました。

また、同月22日には株式会社 Jackery Japanと、「災害時等における連携協定」を締結しました。災害発生時にポータブル電源やソーラーパネルといった物資を円滑に供給できる体制の構築や、平時においても防災訓練や町のイベント等での活用を通じて防災啓発に取り組みするための協定を締結しました。加えて、いざというときに備えて、日常的にポータブル電源等を活用する実証実験を推進していきます。

津南町はそれぞれの企業様と協力し、今後発生し得る災害に備えていきます。



令和7年12月18日、東京電力リニューアブルパワー株式会社と



令和7年12月22日、株式会社 Jackery Japanと
問い合わせ先/津南町 総務課
TEL 025-765-3112



刈羽村

国際セミナーが
開催されました！

刈羽小学校で11月に国際セミナーが行われました。この活動は異なる文化を持つ人々を受容し、共生することのできる態度・能力を身につけることをねらいとして行っています。柏崎や長岡に在住の留学生や、柏崎刈羽のALTの先生方にご協力いただき、34回目を迎える伝統ある活動です。

今年も10人のゲストティーチャーが、ブースに分かれて各国の生活や文化を伝えました。全校児童は縦割り班に分かれて、ブースを回り、様々な国の生活や文化に触れる時間となりました。初めて聞くこと、自分の国との違いにキラキラした目で聞き入ることも。行ったことのない世界にわくわくドキドキが隠せませんでした。

刈羽村教育大綱にもある「世界に向かう学び」事業の一環でもあり、児童生徒の視野が世界に向かう一助になることでしょう。



問い合わせ先/教育委員会教育課
TEL 0257-45-3933



新潟市

共創コミュニティマネージャー
(地域おこし協力隊)が活動しています！

本市では、「共創コミュニティ推進事業」として、地域の「人」自らが主体となる持続可能な地域づくりを推進するため、市内8区において地域で活動する人たちがつなげる機会を設け、コミュニティの形成とそこから生まれる取組を支援してきました。令和7年度より、形成されたコミュニティの取組伴走や、ネットワーク拡大を推進するハブ人材として、地域おこし協力隊(共創コミュニティマネージャー)と称を各々に配置する取組をスタートし、中央区、江南区、秋葉区で各1名が着任しました。商店街活性化、農工商連携、アートといった活動テーマを設け、地域のコミュニティと連携しながら、自分の強みを活かして日々活動を進めています。



中原市長と共創コミュニティマネージャー

問い合わせ先/政策企画部
TEL 025-226-2154

下越地区



新発田市

大阪新歌舞伎座で「新発田牛」の魅力を発信

新発田牛推進協議会(事務局：新発田市農林水産課)が、大阪新歌舞伎座と連携し、梅沢富美男さんや細川たかしさんが出演する1月公演にてコラボPR企画を実施しました！

大阪新歌舞伎座が自治体とコラボするのは全国初のことで、公演期間中には、新発田牛を使った駅弁やレトルトカレーなどの会場販売や、屋台装飾による難読地名の読み方PR、出演者スタッフ向けのPRを実施し、関西方面の多くの方が「新発田牛」、そして「新発田市」を知るきっかけとなりました。

令和3年に誕生した「新発田牛」ですが、知名度はまだまだこれからです。今後も様々な方法で魅力を発信し続けますので、ぜひこの機会に新発田牛をご賞味ください。



連日大盛況の大阪新歌舞伎座の入り口



新発田牛紹介動画

屋台装飾で新発田牛をPR

問い合わせ先/
新発田市農林水産課
TEL 0254-33-3108

新発田牛 HP



五泉市

**子どもたちの声を実現！
新しく「子どもの居場所」をオープン**

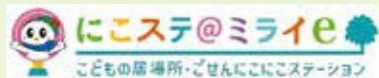
子どもたちが安心して集える場所として「子どもの居場所(愛称「こせんにこ」こステーション)」を12月15日に開設しました。

こどもの居場所づくりは、市が実施した「こどもワークシヨップ」などに寄せられた「こどもだけで安全に行ける場所がほしい」「放課後にみんなが集まれる場所がほしい」といった要望を取り入れ、その思いを実現したものです。

また、市が掲げる「こどもとまんなか」の取組に賛同した越後天然ガス株式会社、市と包括連携協定を締結し、同社のシヨールームをこどもたちのために改修。その場所を市が借り受けるといふ、県内でも珍しい「民設公営」の形で運営しています。

利用料は無料で、高校生までのこどもたちが、施設内の好きな場所で、読書や勉強、ゲーム、創作など自由に利用できます。

これからもこどもたちの意見を聞きながら、みんなの居場所をつくっていきます。



問い合わせ先/五泉市こども家庭課
TEL 0250-43-3911

下越地区



村上市

「村上祭の屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に追加登録

インド・ニューデリーで開催されたユネスコ無形文化遺産保護条約第20回政府間委員会において、「山・鉾・屋台行事」の拡張提案が認められ、新たに「村上祭の屋台行事」を含む4件がユネスコ無形文化遺産に追加登録されました。

この登録は、長い年月にわたり地域の人々が守り育ててきた伝統行事の価値が、国際的に高く評価されたものです。今後も先人の思いを大切に受け継ぎながら、地域一体となって貴重な文化を次世代へと継承し、未来へつないでまいります。

村上祭は毎年7月6日・7日に開催され、今年7月5日に登録を祝して屋台の記念巡行を行います。この機会に、ぜひ世界に認められた祭りをご覧ください。



問い合わせ先/村上市生涯学習課
TEL 0254-53-7511



詳細はこちら



阿賀野市

**新潟ふるさとCM大賞でグランプリ
(第1位)を受賞しました**

県内の自治体がまちの魅力を伝えるCMを制作して競い合う「第6回新潟ふるさとCM大賞」で、阿賀野市は「安田瓦」をテーマに制作し、初めてグランプリを受賞しました。

副賞としてUX新潟テレビ21のCM枠で本年8月までに100回放送されるほか、テレビ朝日系列数局で配信されます。

職員で編成した制作チームで、安田瓦協同組合の全面協力のもと「強く、変わらぬ、美しい」安田瓦の良さを伝えるため、にいがた瓦館からティエ、丸三安田瓦工業、村秀鬼瓦工房、瓦テラスなど、やすだ瓦ロードの各所で撮影を行いました。

安田瓦のオリジナルソングやミュージックビデオも制作したので併せてご覧ください！



問い合わせ先/
阿賀野市 総務部 市長政策・市民協働課
TEL 0250-61-2502



ミュージックビデオなど詳細はこちら！

下越地区



燕市

**学生の声を反映させた
「燕庁舎学習室」がオープン**

燕庁舎2階に、新たな学びの空間「燕庁舎学習室」が誕生しました。

この学習室は、高校生からなる「燕市役所まちあそび部」のメンバーが中心となり、学生たちの意見を取り入れながら整備を進めてきました。学生からの、「スピーキングやプレゼン練習など、声を出せる場所が欲しい」「静かなスペースと話せるスペースを分けたい」などの意見を踏まえ、学生ならではの視点を活かした空間となっているほか、「部活後でも長時間勉強がしたい」「学習室内での軽食可としてほしい」など学生のニーズを取り入れた施設運営になっています。

【設置の経緯】
燕地区に学習室を新しくつくってほしいという市民のニーズや、統合浄水場の開設に伴い、水道局が燕庁舎から移転したことを踏まえ、新たな学習室を設けました。



問い合わせ先/
燕市役所企画財政部 地域振興課 交流推進係
TEL 0256-77-8364



詳細はこちら



胎内市

**胎内市総合グラウンド
多目的運動場を整備しました**

この春、胎内市西条地内の総合グラウンドにアーバンスポーツを中心に多彩な競技が楽しめる屋外スポーツ施設が誕生します。

約2,300㎡の開放的な敷地には、スケートボードなどのローラーズスポーツエリアをはじめ、向かい合わせに2面配置された3×3バスケットボールコートを整備。コートをつなげればフルコートとしても利用できます。さらに、バドミントンやドッジボールなど幅広いスポーツに対応し、世代を問わず体を動かせる環境が整っています。

見通しの良いレイアウトと安全に配慮した動線設計で、こどもや保護者も安心して利用できます。

スポーツを通じて人が集い、地域に笑顔が広がる新たな交流拠点として、ぜひ気軽に足を運んでみてください。



問い合わせ先/生涯学習課 スポーツ振興係
TEL 0254-43-6111

下越地区



聖籠町

聖籠町ふるさと納税でアルビレックス新潟の体験型返礼品がスタート

令和7年度から、聖籠町ふるさと納税の返礼品にアルビレックス新潟の練習場がある新潟聖籠スポーツセンターアルビレッズの体験型返礼品を追加しました。

返礼品は、アルビレックス新潟の選手による「選手とのサッカー体験教室」、「選手との写真撮影会」及び「練習見学&選手との交流会」の3つを用意しました。寄附した方は選手と直接交流し、普段できない体験に終始笑顔が見られました。

来年度もアルビレックス新潟の体験型返礼品の実施を予定しております。詳しくは聖籠町HPや各ポータルサイトをご確認ください。



聖籠町HP

問い合わせ先／
聖籠町役場 総合政策課
TEL 0254-27-2111
FAX 0254-27-2119



関川村

渡邊邸 春の庭を観る、聴く、愉しむ、渡邊邸を舞台にした、職人たちの作品と出会う春の二日間

渡邊邸は、江戸時代から続く豪農の館で、国の指定重要文化財です。趣ある日本庭園と歴史を感じさせる建物で、平成26年12月に6年に及ぶ長きに渡る職人の技術を結集させた「平成の大改修」が終了。

そんな歴史ある渡邊邸の空間で、クラフト、ワークショップ、農産物、食品など約20のクリエイターが出店いたします。音楽などのパフォーマンスや飲食コーナー（テイクアウト販売）もお楽しみいただけます。

手作りとの会話を楽しみながら、暮らしを豊かにする逸品との出会いをお楽しみください。
開催日 令和8年4月18日(土)～19日(日)
入場料 前売券：大人500円 / 子供250円(未就学児無料)

当日券：大人800円 / 子供350円
※前売券は当日来場できなくても、4月28日まで入場券として有効です。

また、前座敷はイシヤマヒロコ、浦井みゆきの作品で構成されており、そちらの作品は4/29までご覧になれます。(販売は18、19日のみ)

ぜひ渡邊邸へお出かけください。
詳しくは国指定重要文化財 渡邊邸のホームページをご覧ください。



渡邊邸HP

問い合わせ先／国指定重要文化財 渡邊邸
TEL 0254-64-1002

下越地区



弥彦村

自動運転バス「ミコピよん号」観光ルート「運行開始

弥彦村では、令和7年12月6日から、自動運転バスによる観光ルートの運行を開始しました。

本路線はJR弥彦線と接続しており、鉄道で来村された方がそのまま村内観光へ移動できる便利な交通手段となっております。

運行は土日祝日に限定し、観光客の多い時間帯を中心に運行しています。

弥彦村は四季折々の魅力にあふれる観光地であり、自動運転バスには多くの観光客の利便が見込まれています。

本取組が、観光の楽しみを広げる新たな交通手段として定着し、弥彦村の新しい観光資源となることが期待されます。



問い合わせ先／弥彦村 産業部 地域交通対策室
TEL 0256-94-3138



粟島浦村

粟島浦村では5月と6月に大規模イベントを開催しています！

粟島浦村では毎年5月に「島びらき」、6月に「クリーンアップ作戦」という、島外から多数の参加者を招いた大規模イベントを開催しています。

島びらきは、粟島の特産物や鮮魚を揃えて観光客の皆様をおもてなしするイベントです。粟島名物料理である「わっぱ煮」、サザエのつぼ焼き、天然岩海苔など、粟島近海の荒波で揉まれた海の幸の数々をお楽しみいただけます。クリーンアップ作戦は島内外の人たちが協力して海岸のゴミ拾いを行うイベントです。令和7年度は335名の方が参加し、合計4.2トンのゴミを集めました。

これらをはじめ、他にも魅力的なイベントをご用意していますので、令和8年度もより多くの方々のご来島をお待ちしています。



問い合わせ先／粟島浦村役場
TEL 0254-55-2111 (8:30～17:00)
FAX 0254-55-2159

下越地区



阿賀町

第34回「つがわ狐の嫁入り行列」開催日決定!!

第34回「つがわ狐の嫁入り行列」の開催が決定しました。開催日は令和8年6月6日(土)です。

津川のまちなかを舞台に、幻想的な狐火とともに練り広げられるこの行事は、狐に扮した花嫁・花婿を中心に、物語の世界へと誘う全国でも類を見ない伝統行事として親しまれています。行当日は、厳かな雰囲気と華やかな演出が重なり合い、訪れる人々を非日常の空間へと導きます。

また、行列の主役となる花嫁・花婿を決定する公開オーディションを、令和8年5月3日(日)に開催予定です。詳細については、決まり次第、阿賀町ホームページ等でご案内します。ぜひご期待ください。



問い合わせ先／
つがわ狐の嫁入り行列実行委員会
(阿賀町まちづくり観光課内)
TEL 0254-92-4766



佐渡市

第26回「はなが甲子園」開催

令和8年3月19日～22日にかけて佐渡市相川地区を会場に第26回全国高等学校版画選手権大会(通称「はなが甲子園」)が開催されます。

この大会は、全国各地から予選を通過した高校生が、豊かな自然・歴史・文化を兼ね備えた佐渡島を舞台に、版画の技術と表現力を競うものです。

選手は3人が1チームとなり、3日間という短い期間で佐渡島を題材とした一つの作品を作り上げます。

昨年度は静岡県立伊豆伊東高等学校の佐渡金山をモチーフにした作品「永久に果てることなく」が最優秀賞となる文部科学大臣賞を受賞しました。今年度も、高校生らしいみずみずしい感性と大胆な表現による名作が生まれることを期待しています。



第25回大会
文部科学大臣賞受賞作品

問い合わせ先／
全国高等学校版画選手権大会実行委員会事務局
(佐渡市役所相川支所内)
TEL 0259-74-3111

下越地区

下越地区

佐渡地区

若手職員が突撃!

弥彦村やひこブランドの魅力に迫る



【弥彦村】
 ○人口：7,401人
 ○世帯数：2,836世帯
 (人口及び世帯数は令和7年12月31日現在)
 ○面積：25.17km²

「やひこブランド」とは、弥彦村の土地の特性を活かして生まれた個性豊かな農産物の総称であり、近年では醤油やワインなどやひこブランドの農産物を活用した加工品が注目を集めています。今回は、そんなやひこブランドがどのように育まれてきたのか、その発展のプロセスについて、弥彦村観光商工課の本間さんと農業振興課の五十嵐さんにお話を伺いました。

1 やひこブランドとは

○やひこブランドの特徴を教えてください。

やひこブランドは、弥彦生まれ弥彦育ちの農産物の総称です。

代表的なものとして、特別栽培米コシヒカリ「伊彌彦米(いやひこまい)」があります。強い旨みと粘りが特徴で、冷めてもおいしく食べられるお米です。また、種なしぶどうの「デラウェア」は、水はけと日当たりの良い丘陵地で育てているため、余分な水分を吸収せず、太陽の光をたっぷり浴びるこ

3 ブランド力向上のために

○ブランドの認知度向上のためにどのような取組を行っていますか。

SNSやホームページでの情報発信に力を入れています。2022年までは品目ごとにそれぞれホームページが存在していましたが、より見やすく、やひこブランドとしての統一感が伝わるよう、農産物のポータルサイトを制作しました。

また、首都圏の駅構内で開催される新潟産直市に出展する際には、その一角に観光PRとして弥彦村ブースを設け、通行される方々に向けたPRを行っています。その効果もあり、SNSなどを通じたWEBキャンペーンでは、新潟県内に限らず、全国各地から応募をいただくようになりました。

○やひこブランドの農産物を活用し、斬新で魅力的な加工品を展開していますが、行政としてのどのように支援しているのでしょうか。

基盤になっているのは、「地元の産品を使って何かを作りたい」「地元の観光や農業を盛り上げたい」という強い思いを持った方々の存在だと思います。

そうした思いを形にするため、ワインであれば令和元年にワイン特区(最低製造数量基準の緩和)の認定を受けたり、醤油であれば、開発に係る事業経費の2分の1を補助金で支援したりと、村としてできるサポートを行っています。開発後は、対外的なPRにも力を入れて取り組んでいます。

また、観光商工課と農業振興課が共同で行って

とで、甘く濃厚な味わいになります。そのほかにも、枝豆や銀杏、しいたけなどがあります。

さらに、弥彦村産の大豆と小麦を100%使用した丸大豆醤油「伊彌彦醤油(いやひこしょうゆ)」や、弥彦村で収穫されたぶどうを100%使用したオリジナルのワインなどの加工品の展開も行っています。



▲「伊彌彦米」と「伊彌彦醤油」



▲弥彦山の麓に広がる田畑

2 ブランディングのプロセス

○弥彦村の農産物がやひこブランドとして確立したきっかけや経緯を教えてください。

原点は、弥彦村の米を好んで購入してくださるお客様のニーズに応えるため、1998年に有機

取組の一つに、「観光・商工事業者と農業者マッチング会議」があります。稼げる産業づくりを目的に、生産者と観光・商工関係者が一堂に会し、アイデアの共有や、企画づくりなどをを行う場として、年に数回開催しています。こうした場を通じて新たなつながりが生まれ、これまで活用されてこなかった資源の有効活用や、継続的な特産品の開発につながっています。



▲最近開発された商品として、美味しさに遜色がなくとも形状やサイズが規格外となり出荷できなかった「伊彌彦ちゃまめ」を活用した、「茶豆ポタージュ」「茶豆アイスクリーム」を商品化した。

4 ブランディングの成果

○ブランディングを進めて、どのような効果や反響がありましたか。

伊彌彦米については、ブランド化した2016年度において、ふるさと納税の寄附額が対前年度で約3倍に増加しました。その後もふるさと納税の寄附額は増加傾向にあります。ブランドの認知が進んだことで、首都圏へPRに何うと、以前にも来てくださった方が再び足を運んでくださったり、「ふるさと納税しましたよ」と声をかけていただいたりすることもあります。ファンが広がっていることを実感できる瞬間ですね。

今後の展望について教えてください!

「弥彦といえば○○」と、すぐにイメージしてもらえような、全国的な知名度の向上を目指しています。そのためには、時代のニーズに合った商品の展開を進めながら、弥彦村全体を盛り上げていくブランディングに取り組んでいきたいと考えています。

また、それに伴って観光客一人あたりの消費額の増加にもつなげていきたいです。やひこブランドや商品の魅力を知っていただき、繰り返し購入してもらったり、実際に弥彦村を訪れてもらったりする機会を増やしていきたいですね。

「こんな商品を作って地域を活性化したい」といった想いや構想を持つ方は、まだまだ多くいらっしゃると思います。そうした声を大切にしながら、今後も村として、きっかけづくりや支援を続けていきたいと考えています。



今回取材に対応いただいた弥彦村観光商工課 本間さん(左)と農業振興課 五十嵐さん(右)

人事交流

市町村→県
県→市町村

近況報告

燕市
県市町村課

関
春香

令和6年4月から総務部市町村課でお世話になっております。令和6年度は行政班に所属していましたが、令和7年度からは課内異動で財政班(財政担当)に所属しています。行政班では、主にマイナンバーカードの普及促進の業務を担当し、県民の方々に日常生活の中で気軽にカードを申請していただけるよう、複数の市町村で出張申請受付事業を実施させていただきました。

財政担当では、主に市町村の交付税検査の業務を担当し、検査対象団体を訪問して検査を実施しました。そのほか、係全体で普通交付税の算定業務に取り組んだり、市町村の財政事情をヒアリングしたりと、県ならではの業務に携わらせていただいています。また、衆議院議員選挙や参議院議員選挙の業務にも携わることができました。

派遣当初は、慣れない環境の中、各種システムや業務の進め方の違いに戸惑ったことに加え、国や市町村に対して県としてどう対応すべきかなど日々苦悩しましたが、周囲の職員の方々がまから親身にサポートしていただき、なんとか業務に取り組むことができました。

県職員の方々は、次々と押し寄せてくる業務を、広い視野で効率的か

つ円滑に進められており、日々驚かされています。私自身、知識やスキルはまだまだ未熟ですが、資料の作成スキルや業務をこなすスピード等、成長を実感しているところです。また、県職員の方々が各市町村の担当者の方々と関係構築したことは、私自身にとっても大きな財産となりました。自分自身のスキルアップはもちろんなこと、人脈を形成できるまたとない機会ですので、迷われている方は是非挑戦してみてください。

派遣期間も残りわずかとなりましたが、一日一日を無駄にせず様々なことを吸収し、燕市に戻ってからは、市町村課での経験を活かして職務に励みたいと思います。



新潟県
小千谷市企画政策課

大谷地
友佳

令和6年度からの2年間、小千谷市企画政策課でお世話になっております。総合計画の策定業務を中心に、計画の進捗管理や実施計画、地方創生関係交付金に関する業務を担当しています。

今年度は10年に一度の総合計画策定の年であり、策定にあたり外部委員や職員から「多くの市民が手に取り、身近に感じ、共感できるような計画にしてほしい」との意見が出されました。これを受け、従来の総合計画の枠組みにとらわれず、構成を二から組み立て直すこととしました。全体の流れから、用語の定義など細部に至るまで、最上位計画としての役割と、誰が読んでも理解しやすい内容との両立を意識しながら、議論を重ねました。

策定を進める中で、考え方や表現を一つにまとめていく難しさもありましたが、「より良いものにしてよう」という共通認識のもと、チームとして前向きに取り組めたことが強く印象に残っています。

その背景には、個々の裁量が大きく、上司にも気軽に相談できる雰囲気の中で、新しい提案にも「まずはやってみよう」と背中を押してもらえる小千谷市の組織風土があると感じました。

派遣期間中は、自ら考えながら関係者と調整を重ねる場面が多く、基礎自治体の計画業務について様々なことを学ばせていただきました。温かく迎え入れ、日々多くの助言をいただいた小千谷市のみなさまに感謝するとともに、この経験を今後の県の業務に活かす、県と市町村がより良い連携を築いていけるよう努めていきたいと考えています。



企画政策課企画経営係(前列真ん中が大谷地)

おすすめ!

ふるさと納税お礼品の紹介

加茂市

加茂市から、確かな技術が息づく逸品をふるさと納税でお届けします。
「とにかくあったかい靴下 女性用 (22~24cm)」
「ベージュ (株式会社山忠)」

山忠の女性用靴下。その最大の特徴は、セーター約1着分の糸を使い、空気をたっぷり層にする特殊構造。圧倒的なボリューム感と保温力で、女性の冷えに寄り添います。普段使いにはもちろん、ふるさと納税を通して大切な方へ「温もり」を贈るのもいかがですか。



東芝真空IH炊飯器 炎匠炊き5・5合 RC-10RXA (K) (東芝ライフスタイル株式会社)

東芝の真空IH炊飯器は、真空ひたしでお米の芯まで吸水し、1420W大火力と銅かまど丸釜、さらに加熱しながらの追い真空蒸り、ツヤのあるごはんを炊き上げます。東芝の炊飯器で毎日の「ごはんを」馳走に。



職人こだわりのあったかい靴下と、毎日のご飯をさらに美味しくする炊飯器を加茂市のふるさと納税で手に入れませんか。

問い合わせ先 / 加茂市商工観光課ふるさと寄付金係
TEL 0256-52-0080
MAIL syoko@city.kamo.niigata.jp



ふるさとチョイス

糸魚川市

糸魚川の地酒 (糸魚川五蔵)

糸魚川市は知る人ぞ知る「米どころ」。大断層の「糸魚川静岡構造線」を有する市内の平野部は狭く、谷がいくつもあり、田んぼには山々の栄養が溜まりやすい地形をしています。日本酒もそのお米を使って作られますが、作り手によって仕込み水やお米が異なります。市内には酒蔵が五蔵あり、「糸魚川五蔵」と呼ばれ、それぞれが違った個性を持った日本酒を作っています。

ぜひ一度飲み比べて、日本酒ごとに異なる香りや味わいをお楽しみいただき、お気に入りの日本酒を見つけてみてください。

【糸魚川五蔵】(写真左から) 田原酒造「雪鶴」、渡辺酒造「根知男山」、猪又酒造「月不見の池」、池田屋酒造「謙信」、加賀の井酒造「加賀の井」



ふるさとチョイス

問い合わせ先 / 糸魚川市企画定住課
TEL 025-552-1511

田上町

湯田上温泉利用補助券

湯田上温泉は、元文3年に開湯し、開湯から280年以上の歴史ある温泉です。泉質はナトリウム・塩化物質泉で、皮膚病、婦人病、消化器病、神経痛等に効能が優れ、さらに源泉は飲泉もできるなど、効能が高く、地元では昔から「薬師の湯」として親しまれています。

現在、町内の旅館・ホテル4軒では「湯田上温泉利用補助券」を宿泊や飲食等にご利用いただけます。また、各施設ではその場で寄附ができる「現地決済型ふるさと納税」も導入しております。歴史ある名湯を拠点に、田上町の魅力をぜひ満喫してください。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。



問い合わせ先 / 田上町役場総務課 政策推進室
TEL 0256-57-6222 FAX 0256-57-3112

編集後記

「特集」では、「Niigata選挙カレッジ」を取り上げました。若者の投票率はまだまだ低い傾向にあるものの、県内の学生が選挙に関心をもち、若者の政治意識や投票率向上のための啓発活動を行っていることに感銘を受けました。また、活動している方々にとっても、自己成長の場となったようでした。今後とも積極的な活動を続け、未来を担う若者の投票率向上に貢献して下さることを期待しています。

「若手職員が突撃!」では、「やひこブランド」を取り上げました。商品づくりを通して地域を活性化させたいという想いを、きっかけづくりや環境整備によってつないでいく弥彦村の姿が印象的でした。これからも、地域住民と村のつながりから、素晴らしい商品が生まれることを楽しみにしています。

最後に、取材や寄稿にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。(I)

本号の表紙

本号の表紙は、特集を組んだ「Niigata選挙カレッジ」にて行われた「こども投票所」の様子と、選挙のマスコットキャラクターです。明るい雰囲気が伝わってきます。



宝くじ
公式サイト

すぐ買える 当たりがわかる クイックワン

Quick One

クイックワン



宝くじの収益金は
私たちの街の公共事業等に
役立てられています。



お問い合わせ先

宝くじコールセンター

TEL: 0570-01-1192 (ナビダイヤル 有料)

TEL: 011-330-0777 (有料)

公益財団法人新潟県市町村振興協会